

# アフリカの人々と名付け 13

## キプシギスの「去勢牛名」—

牛を讃え、自分を牛と同一視する名前

小馬 徹

### 牛の名付け

キプシギスの人々の間には、これまでに取り上げた詩名の他にも、これとよく似た一面をもつ名前がある。それは「牛名」、より正確には「去勢牛名」(ox-name)である。

植民地化されるまでは、粗放な雑穀栽培を行ったとはいえ、キプシギスは生活の万端を牛に依存していた。男性は、自分の所有する牛の群れを眺めやり、うっとりときを過ごす事を人生の至福としていた。白人入植者はそのようなキプシギス人を見て、怠け者と貶んだ。しかし、キプシギスの戦士にとってその行為は、来るべき略奪戦に思いを馳せて靈感と動機付けを得る重要な「仕事」であった。

牛の名前は、身体の色模様や角の形状、或いは性格など、何かの特徴に因んでいる。つまり、その特徴を指す語に、雄牛なら男性接頭辞 (Kip-) を、雌牛なら女性接頭辞 (Chep-) を付けて名付けた。ただし、去勢牛は接頭辞を付けず、その語自体が名前となった。

そこで、牛のこのような名前は、実は名前ではなく、牛の色模様・角の形状・性格・性別に基づく範疇だという議論も出来そうだ。しかしながら、この見方は正しくない。

牛のどの特徴に因んで名付けるかは、偏にその持ち主の主観的判断による。色模様などに対する彼の好みや、自分の他の牛たちの特徴との相対的対比、或いはその牛に関する印象的な出来事などが、大きな影響を与える。だから、或る牛の「客観的な」類別と実際の名前が異なる場合が決して少なくない。

### 去勢牛を讃える詩と「牛名」

キプシギスの「牛名」とは、男性が自分の最愛の去勢牛の名前をほぼそのまま自分自身の名前とするものである。「牛名」は、その去勢牛の名前の後に「去勢牛」(-ei) という接尾語を付けて作る。しかも、「牛名」はその去勢牛を讃えるために持ち主が創った詩の冒頭の語句と同じになる。このように創造的な詩に由来する点でも牛の名前は名前であり、単純な類別名称ではあり得ない。

まず、幾つかの「牛名」の例を引いておこう。「緑の黒毛なす去勢牛よ／銅の色なす緑の去勢牛よ」という詩には、「緑の黒毛なす去勢牛」という「牛名」が対応する。自分のお気に入りの去勢牛が、丸々と肥えて艶やかな毛並みが美しく、それを眺めるのが無上の喜びだとこの詩は歌うのだ。この詩が更に含意するのは、今や彼の牛群全体が銅色に見えるまでにこの毛色の牛が増えた喜びである。

「虎斑の去勢牛」という「牛名」に対応する詩は、「虎斑の去勢牛よ／虎斑の牛は一頭ならず」であり。この場合も、「牛名」の持ち主は虎斑の牛を好んでおり、しかも自分の牛群の大きさを誇示している。つまり、その牛群の牛たちは、ほとんどが虎斑なのだ。

### 獐猛な牛、賢い牛

「他の牛を突き殺した去勢牛」という「牛名」に対応する詩には、幾つもの異版がある。その一例は、「他の牛を突き殺せし去勢牛よ／アラップ・チェボレの〔去勢〕牛たちを突き殺せし去勢牛よ」である — アラップ・

チェボレの部分には、様々な個人名が入る。自分の去勢牛の獍猛さを嘉し、自分をこの牛に重ね合わせて誇っているのである。

「去勢牛が蜂蜜を掘り起こした／ラボソがこの牛を狙う敵に未だ気付かぬ内に／黒地に振り撒けるミルクの白斑が全身を染める去勢牛よ」という詩がある。牛が偶然に地蜂の蜂蜜を角で掘り当てた。牛群の世話に忙しく、そのために、この牛を狙っている敵の存在にそれまで気付いていなかった牧童のラボソが敵に気付いた。何と、賢い強運の去勢牛よ。この詩は、この去勢牛をそう讃えている。

もちろん、他のどんな毛色の牛に因む異版も自在に作れる。また、牧童の名前がラボソである必然性はどこにもない。

### 統治者なき社会と統制

さて、キプシギスの「牛名」の社会的機能は、社会と権力の関わりにおいて、いかに読み解かれるべきであろうか。

王制社会や首長制社会では、統治者としての王や首長が卓越した権力や権威を持つ。言い換えれば、それは階級差に基づく権力や権威の偏在が維持されて初めて順調に機能する社会である。一方、無頭的な平等制社会は、権力や権威がいかなる個人や社会分節にも偏らず、平均的に分散される事によって初めて上手く運営され得る社会である。

キプシギスの伝統社会は、統治者なき平等制社会であった。したがって、詩の言葉による名付け、即ち神たらんとする創造的な言葉を手段とする個人の差異化は、権力への意志として抑制される必要があった。

しかし、政府なき社会の常として、それは暴力による一方的な抑圧ではあり得ない。既に見た通り、詩の言葉は、託された個人の個としての矜持を一旦解放しながら、すぐに制度としての類の中にそれを取り込んで中和し、無力化するものであった。キプシギスの「牛名」の社会的機能も、まさにこの文脈で捉え

られるべきであろう。

### 牛を誇り、自己を誇る

「牛名」は、他の一般的な詩名とは異なって、「××を屠る」詩名と同じく性接頭辞をもたない。この特徴は、川田順造の言う意味で「自称」である事の指標であると見て誤らない。つまり、「牛名」の大きな特徴は、「××を屠る」詩名と同様に自ら名乗る事においても——言及の次元ばかりでなく命名の次元においても——「自称」である点にある。

しかも、「牛名」には他の詩名のような、擬似女性接頭辞Tap-を付けた女性版が存在しない。更に、「××を屠る」詩名のように戦士を引退した後にのみ名乗れる名前でもない。

かつて、キプシギスの男たちは、同年齢組員の家に集って、自分の最愛の去勢牛を自慢しあった。そして、両手で様々な角の形を模しつつ、言葉を尽くして牛を褒めた。この慣行は既に廃れた。だが、今でも酒に酔うと、例えば、「茶色のダニのように平たく鈍い角を生やせる去勢牛よ……」と、最愛の去勢牛を讃えて誇らかに歌い出す男たちがいる。それは、個としての矜持の発露なのである。

つまり、かつてキプシギスにとって、「牛名」こそが最も直接的に自らの矜持を示す名前だった。しかも、それに対する社会的な抑止は比較的緩やかだったと考えられる。

キプシギスでは、成人儀礼であると共に新しい年齢組を開く機能も合わせもつイニシエーションは、今日でもきわめて大きな関心事である。キプシギスという民族の自称は、「(イニシエーションを経て)再生した男」を意味するが、イニシエーション諸儀礼が象徴的に表現しているのは、子供が巨大な牛に飲み込まれ、牛として再生する事である。

キプシギスは、生活の万般を牛に依存し、牛を限り無く愛し、自らを牛に準え、そして牛としての名前を名乗った人々なのである。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)